

V 石岡市内出土旧石器時代資料の観察・分析報告

窪田 恵一

下ノ宮遺跡（旧正月平遺跡）の旧石器（第1図1）

本資料は1973年刊行の『常総台地における先土器時代資料(一)』を初出報告〔金子・川崎・渡辺 1973〕とする旧石器時代資料であったが、2000年に始まる茨城県考古学協会主催の旧石器時代シンポジウムの検討作業時点で所在不明となっていた資料である。2012年3月に宮部遺跡出土資料を観察した際に同遺跡の収納コンテナ内に紛れ込んでいたことに気付き、改めて正月平遺跡採取資料として再確認できたことから、今回観察作業をさせていただいた報告である。

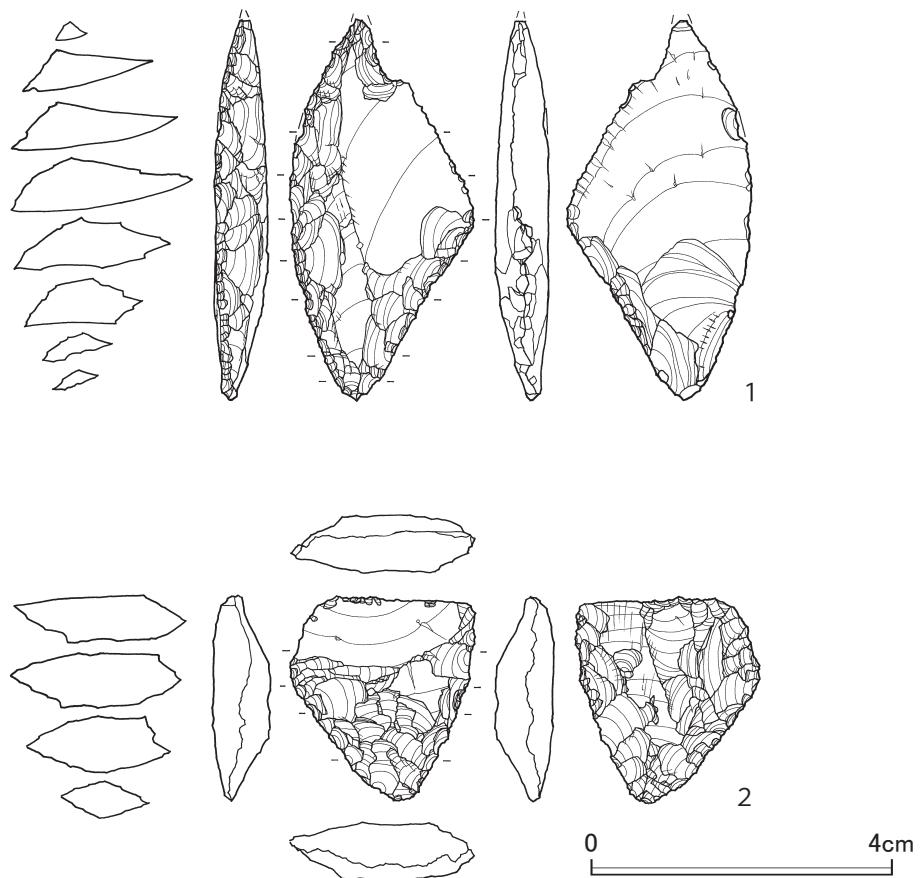
本資料の規模は長さ49.9mm、幅24.4mm、厚さ6.9mm、重量6.57gで、石材は内部が灰黄色（2.5Y 6/2）に黄褐色（2.5Y 5/3）の変色部位が表皮状に接する房総半島南部の白滝産頁岩で、変色部位の有り様から素材原石の表皮に近い部位を使用したと考える。比較的大振りな剥片を使用した様で腹面基部寄りに素材剥片の打瘤裂痕（バルバスカーナ）が残る。左側縁は緩やかに弧を描くように成形されていて、調整剥離はすべて腹面側から施す。こちらの調整作業は押圧剥離であると考える。右側縁は張り出すように成形されていて、張り出し端部から基部寄りは背腹両面に調整剥離を施して僅かに抉り込む様に成形している。腹面側の調整剥離末端はすべてが蝶番状剥離となり、押圧剥離ではなく打撃による剥離であると考える。刃部に当たる部位は素材剥片の縁辺を残し、槌状剥離は施していない。全体では、右に大きく張り出す切り出し状となり左右非対称形である。右側縁先端側の剥離は過去の剥離であって、最近の欠損ではない。また先端の折損部位は背面から腹面に入力が抜ける蝶番状剥離となっている。成形状況から本資料は東内野型有撃尖頭器とし、石材が白滝頁岩製であることから房総半島から完成品として搬入されたと考える。

茨城県域で有撃尖頭器は山地を除く県内全域で確認されているが、東内野型有撃尖頭器は分布域が県南部に偏っている。東内野型有撃尖頭器を研究された道澤明氏の論文〔道澤 1994〕が大いに参考となるが、道澤編年の第4段階に該当する資料は本資料の他に行方市（旧北浦町）木工台遺跡例〔荒井・高野1999・窪田2006〕があるくらいで確認数は少ない。第4段階の石器の特徴は、刃部が大きく張り出すが槌状剥離が無く切り出し形状が形骸化している点にある。筑波山南麓の平野域は東内野型有撃尖頭器の分布域としては外縁北部に当たる地域であり、加えて当該資料の数少ない最終段階の検討資料であることから、下ノ宮遺跡資料は貴重であり今後の調査で遺跡の内容把握が進み関連資料が発見されることを期待したい。

半田原遺跡出土の黒曜石製旧石器の産地推定（第1図2）

半田原遺跡は1995～1996年に県道改築工事に伴い財団法人茨城県教育財団で発掘調査が実施された遺跡で、立川ローム考古学層序第IX層下部から約1,800点の石器が出土した〔仙波1997〕。ホルンフェルスと那珂川流域産黒色安山岩を多用し、基部加工のナイフ形石器を主体にした石器群で石器製作に使用した敲打器が多数含まれている。また董青石の結晶が数mm角まで晶出したホルンフェルスを用いた打製石斧も共伴する。同じ董青石ホルンフェルスは他の使用例が土浦市（旧新治村）本郷原山五反田遺跡に1例（石核）しか確認できていない（註1）。董青石の結晶サイズが、石器製作者の理想とする剥片剥離において破碎や折損の様な製作障害となるほど大きく成長し、石器製作には不向きな石材と捉えられていたと考える。この董青石ホルンフェルスは筑波山東麓付近に限定的な使用を想定する石材で、つくば市東部から土浦市北西部や石岡市西部の筑波山麓部周辺において石斧などの礫核石器に用いられた関連資料の発見を予測している。

旧石器時代資料中に黒曜石を使用した石器が1点含まれていたことから、2007年に国立沼津工業高等専門学校



第1図 石岡市内出土の旧石器実測図 (S=1/1)

表1 半田原遺跡黒曜石製石器産地推定結果

分析No.	遺跡名	器種	推定産地	判別分析					
				第1候補産地			第2候補産地		
				判別群	距離	確率	判別群	距離	確率
IBK07-40	半田原遺跡	台形様石器	神津島恩馳島群	KZOB	9.21	1	WOMS	128.09	0

元教授望月明彦氏に御協力いただき蛍光X線による産地推定作業を実施した。分析終了後『石岡市報』2008年9月に分析結果を簡単に紹介したが、改めて報告する機会を頂いたので報告する。分析方法の詳細は『山川古墳群（第2次調査）』の望月報告〔望月2004〕に拠る。分析の結果は東京都伊豆諸島の神津島恩馳島群（KZOB）産である（分析番号：IBK07-40・表1参照）（註2）。

分析した資料の規模は長さ27.3mm、幅24.4mm、厚さ7.3mm、重量4.45gで基部側の背腹両面・両側縁から押圧剥離により尖端様に成形している。腹面の末端は背面に入力が抜ける蝶番状剥離が認められ、素材剥片生産時に生じたと考える。全体に黒色不透明だが、部分的には着色ガラス状で透明感が強い箇所もある黒曜石である。

後期旧石器時代前半のX層段階からIX層段階にかけて製作されている台形様石器は、那珂川下流の武田遺跡群において玉髓や貞岩類を使用し、運用形態は原石の搬入から製品の生産まで確認されている。黒曜石を使用した台形様石器は県南部を中心分布するが、石材の運用形態では原石の搬入から成形が確認できた資料はなく、すべて完成品として搬入されたものと考える資料である。現在までに4点（土浦市1点、かすみがうら市1点、下妻市1点、石岡市1点）確認しており、全て望月明彦氏によって産地分析が実施されている。産地の内訳は土浦市寺畠遺跡例・かすみがうら市富士見塚古墳例〔川口2000〕の計2点は栃木県高原山甘湯沢群産（THAY）で、下妻市（旧千代川村）西原遺跡例〔石川2000〕は蓼科冷山群産（TSTY）と当遺跡資料の神津島恩馳島群産となる。

後期旧石器時代前半のX層段階からIX層段階という新人段階の活動開始初期でも、茨城県には関東平野周辺の

山岳地域ばかりか島嶼地域産黒曜石の搬入が確認され、茨城県域で活動していた旧石器人集団にも海峡を挟んだ遠隔地黒曜石産地の情報が早くから知られていた事を示す事例と考える。しかし島嶼地域を含めた伊豆・箱根産黒曜石が旧石器時代を通じて茨城県域に次々に持ち込まれることは無く、本格的に剥片石器生産に使用されることになるのは縄文時代中期前半まで待たなければならなかった様だ。

半田原遺跡を形成した旧石器人は石器製作に用いる石材の大半を県内で得ていたが、黒曜石の入手のみを遠く離れた南方海上に位置する伊豆諸島産とした。後期旧石器時代を通じて伊豆諸島と本州が陸続きとなったことは無いため渡航には外洋航行用の船を使用せざるを得ないが直接現地まで赴いて採取活動したとは考えにくく、関東平野南部地域に活動していた他の旧石器集団との交流から入手したと考える。3万6000年前頃から黒曜石各産地の質に対する意識が如何様であったかは不明だが、茨城県域からは決して見えなかった南の島の黒い石がどのように旧石器人の目に映ったか想像すると興味が尽きない。

今回の分析では、それまで想定もしていなかった伊豆諸島産黒曜石が茨城県内陸部にまで搬入・使用されていたことが判明したことは衝撃的な結果であった。今後の産地分析作業が進展すると、近傍の栃木県高原山産以外の他産地黒曜石の更なる使用実態が判明する可能性を考慮しながら観察・分析を継続しなければならないことを思い知らされた結果であった。今回の報告の機会を与えていただいた小杉山大輔氏と分析作業を実施していただいた望月明彦氏には感謝申し上げる。

(註1) 報告書では第6号住居跡に敲打器と文章記載はあるが、実測図は掲載されていない。

(註2) 第2候補産地の記号「WOMS」は長野県和田峠の「和田牧ヶ沢群産」である。

〔参考文献〕（著者50音順・敬称略）

荒井保雄・高野節夫1999『北浦複合団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 木工台遺跡2』茨城県教育財團文化財調査報告第152

集 茨城県 財團法人茨城県教育財團

石川太郎2000「Ⅲ. 旧石器時代」『西原遺跡発掘調査報告書』千代川村埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 5-20頁 千代川村教育員会

金子 進・川崎純徳・渡辺 明1973『茨城県における先土器時代資料（一）』常総台地研究会

川口武彦2000「霞ヶ浦町内出土先土器時代石器群の検討」『婆良岐考古』第22号 75-95頁 婆良岐考古同人会

鶴田恵一2006「茨城県南東部・行方台地の旧石器—潮来市今林遺跡・行方市木工台遺跡の資料を中心に—」『茨城県考古学協会誌』第18号 1-26頁 茨城県考古学協会

仙波 亨1997『一般県道石岡つくば線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 半田原遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告第122集 茨城県 財團法人茨城県教育財團

道澤 明 1994「東内野型尖頭器の出現と変遷」『古代文化』第46卷第12号 14-32頁 財團法人古代學協會

望月明彦2004「付編2. 土浦市内遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定」『山川古墳群（第2次調査）—土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』第8集 122-126頁 土浦市 土浦市教育委員会 山川古墳群第二次調査会